台湾留用日本人の足跡を追って(5)
金関丈夫先生の常識講座

安溪遊地・安溪貴子

金関丈夫（かなせき・たけお）博士を中心とする、戦後台湾留用日本人学者たちによって、２２８事件なども起こる緊迫した政治情勢の中、知的な息抜きのための『回覧雑誌』が作成されました。その全体の目次と筆名・執筆者の一覧は、本誌第 66 号（2020 年新年号）を御覧ください。

2022 年春号の本誌 75・76 号では、金関丈夫の本名による学者風のノートを紹介しました。今回は、ぐっとくだけて、林熊生・林家熊丸・林馬生・蓬頭児などの筆名によるエッセーもご紹介します。文中には、K教授やキンカン博士も登場します。『回覧雑誌』の同人が主人公の、林熊生筆らしい架空広告も、あわせてご紹介しましょう。

編注は［　］などのように示しています。

現在台湾大学図書館に収蔵されている『回覧雑誌』の利用にあたっては、同館特蔵組の林慎孜さんのお世話になりました。所載の金関先生関連のデータの使用については、生前に金関恕先生にご了解をいただいています。

仲人の記

金関丈夫

僕が仲人をした最初のＦＡＬＬは蛯原祥介夫妻（の結婚）である。臺灣神社の前で記念撮影をし、榮座を借り切つて披露會をした。とても池田［敏雄］君のときのやうな、閑靜なものではない。その記念寫眞をみても、知れる通り、蛯原新夫婦は、七十三に、六十五と云ふ、似合年の一對であつた。

その數年前に、尾崎秀眞翁の紹介狀を持つて、一人の老青年が僕の研究室を訪ねてきた。用件は少しお門違ひであつたが、醫事相談に類するもので、近頃萬華へ行つても、肝腎のものがシャンとしなくなつたが、これはどうしたものか、と云ふ相談であつた。年齡をきくと、當年七十になります、と云ふ答へであつた。九州大學の精神病科では、曾てスタイナハ［Eugen Steinach］流の若返り法なるものを施術したこともあつたから、いづれにしても精神科へ紹介した方がよからうか、と考へたが、その人、卽ち蛯原祥介氏は、割りにその相談だけが解剖學教室訪問の目的でもなかつたと見えて、いろいろと面白い話をして行つた。

蛯原氏との交際はかうして始つたのであるが、昨年の三月、彼が離臺する迄の、數年に亙るこの交際の間に得られた、蛯原祥介に關する見聞をまとめると、立派に一部の畸人傳が出來るだらう。

或る日、蛯原氏は僕のところへきて、結婚式をやるから仲人になれと云ふ。相手は、ときくと、豫て內緣の間柄であつた、當年六十五の「大年增」だと云ふ。決して物好きから引き受けたわけではなく、彼は非常な强制力があつて僕が仲人するのは、最初から決定的のことゝして話してゐるので、僕も觀念してその役を

『回覧雑誌』第七號　光復の宝島へ　タカラッポ劇団来る　の広告

引き受けた。

すると、その翌日、蛯原氏は一通の誓約書を持つてきた。そして僕に副署せよと云ふ。見ると、それはこの結婚によつて蛯原夫人となる婦人から、蛯原氏あての誓約書であつて、「今後何によらず夫(おつと)の言ひつけに背く場合には、全財産を没收されて裸身で追ひ出されても決して異議は申し立てぬ」と云ふ意味の文書で、その婦人の署名がある。こんな誓約書が有效になると、若し蛯原が惡黨であつた場合、その婦人が非常な迷惑を蒙ることにならぬとも限らない。それで僕はこれに副署することを拒んだ。しかし、同じやうな誓約書を、蛯原の方からその婦人に出すのであつたなら、僕はこの方へ副署しやう、と交換條件を持ち出した。婦人の方の財産はどんなものか知らないが、蛯原にはどうせ大した財産もないだらうし、假りに裸身一貫で追ひ出されるも、この男ならへこたれもしないだらう、と考へたからである。それに第一その婦人には僕は未だに會つたこともなく、從つて、どう云ふ覺悟で、そんなものを書くかと云ふことも判らないではないか。と云ふと、蛯原氏は、

「いや、僕が出す方には、尾崎君が副署することになつてゐる。あなたはこれに署名して下さい。」

面倒だつたから、これも觀念して副署

した。（蛯原側の誓約書にどんな文句があつたかは、僕は知らない。）

結婚式當日になつて見ると、僕は夫人側の誓約書に署名したほどあつて新婦の側の介添へになり、新夫の方には尾崎翁がついてゐる。つまり、尾崎翁と僕とが夫婦役と云ふことなつてゐる。だから、僕は記念寫眞の中でもなるほど「大年增」の、新婦の隣に坐つてゐる。

それから披露會だ。蛯原は榮座を借り切つて、臺北市内から、自分と同じ七十歳以上の老人を集めた。勿論知るも知らぬも皆招いたのである。そして、御馳走に、自作自演の舞踊を見せる。その前に僕に演說をやれと云ふのである。何でもいいが、敬老の意を含めたものがいゝと云ふ。これも觀念して、僕は生れて初めて、劇場の高座から敬老演說をすることになつた。尤も聽手は皆老人だからこれは教訓ではなくて、お世辭の演說である。どうせ知つた者はゐないだらうと、大膽に演壇に立つて、ふと正面を見ると、茂木宣教授がこちらを見てにやにやしてゐる。こんなやり難い演說を、僕はあとにも先きにもしたことがない。また何と思つて茂木教授はあんな所にゐたのか、彼もよつぽど變り者だ。尤も、落語にかう云ふのがある。町内に「缺伸指南」と云ふ看板が出た。若い者が集ると、

師匠「おや、熊さんのお顏が見えないね」

若いもの「さつきちよいと誘つて見やしたが、何だか氣が進まないから止しにしようつて云ふから、置いてきやした」

師匠「ふん、それは變つたお方だの。」

どちらが變わつたお方だか知れたものではない。

一席の敬老演說を終ると、僕は新夫君の新作舞踏を拜見することは遠慮して、忽に家に引きあげた。茂木先生はそれも見たに違ひない。すると、やつぱり彼の方が僕より少しよけいに變つてゐる勘定になるわけだ。

池田敏雄先生の仲人記を書くつもりで、他の話を書いてしまつた。しかし池田氏は蛯原氏ほど變つてゐないから、書くことは別に無い。ただ結婚式の後の話は、池田氏のも大ぶ變つたところがあるやうだが、仲人は宵の口と云ふからこゝいらで引き下がることにしよう。

（第六號）

特輯　初戀の記

吉川先生その他

林　熊生

吉川先生は黑つぽい着物を着て、小豆色の袴を穿いてゐた。髪はひさし髪だつたが、一時流行つた二百三高地と云ふやうなものではなかつた。なぜなら、これは日露戰爭以前の話だから。

吉川先生のこの服裝は、その頃、またその後もながく、田舍の小學校の女教師の服裝としては、至極ありふれたものだつたに違ひない。しかし、その頃の僕の鄕里では、恐らく非常にハイカラな風俗と感ぜられたのであらう。尋常小學校一年生の僕には、大人の世界の消息は皆目わからなかつたが、吉川先生――まちがひなくまだ獨身だつた――は、村の

青年達のあこがれの的ではなかつただらうか。その空氣が、子供達の間にまで、蔓延してゐたのではなかつたかと思ふ。僕が數へ年七つの秋に、九州の若松から鄕里の小學校へ轉校したときには、吉川先生は、鄕里の小學校の間の一つの偶像であつた。そして、僕もすぐその空氣に感染した。

しかし僕は吉川先生の授業をうけたことは一度もなかつた。僕は一年生で、吉川先生は三年生の受持ちだつた。三年生はそれを自慢にしてゐた。僕等はときどき、教場の窓から向ひ側の三年生の教場をながめて、吉川先生の姿が見えはせぬかと、盜み見したりした。

その後まもなく、吉川先生は郡下の他の村の小學校へ轉勤することになつた。校庭に梅の花が咲いてゐて、その前で三年生の女の兒たちが、吉川先生の袂にすがつて泣いてゐる光景を、僕は今でも記憶えてゐる。それは吉川先生が學校を去る日であつたのだらう。したしく言葉をかけられることのない僕等も、やはりこの離別を悲しがつた。

それから三年あまりたつと、日露戰爭が終り、善通寺の師團の兵隊が凱旋して、練兵場でなにかお祭りのやうなことをやつた。僕等は教師に引率されて、一里あまりの道を歩いて、それを見にいつた。僕は記憶えてゐる。僕等はめいめい、竹の皮包みの辨當を白い風呂敷に包み、それを脊中へ斜に脊負つてゐた。

僕等は練兵場に着くと、亢奮した引率者に絶えず罵られながら、混雜してゐた夥しい群衆の間を、ただ右往左往するやうな形になつてゐた。と、突然たれかが、「吉川先生がゐる。」と叫んだ。「吉川先生」、「吉川先生」と云ふ叫びが、忽ち列の前後にひろがつていつた。そしてそれを聞くと、生徒たちは皆立ちどまつてしまつた。中には列を離れて、もう驅け出しさうにしてゐる者もあつた。

吉川先生が、新しい任地の生徒を引率して今日の催しに臨むと云ふことは、勿論考へ得られることであつたが、僕等にはそんな豫想のある筈はなかつた。それだけに、この邂逅の歡びは大きかつた。僕はすぐその亢奮に卷き込まれた。皆の見てゐる方へ眼をやつて、吉川先生の姿をさがし求めた。

しかし、僕が吉川先生の姿を認める前に、引率の先生の叱咤の聲が起り、行列は再び整へられた。もはや後をふり返ることも出來なかつた。この時吉川先生の姿をひと目見ることの出來なかつたことは、その後當分のあひだ、僕の心を痛めさせた。

吉川先生に關する僕の想ひ出は、これが全部である。

考へて見ると、吉川先生がどうしてそんなに好きだつたかと云ふ、個人的の理由は、僕には少しもなかつた。吉川先生がどうしてそんなに人に好かれたかと云ふ理由も、僕には殆んど判つてゐない。一種の集團心理で、ただわけもなく吉川先生にあこがれてゐたのである。しかしそれにしても、僕にとつては、母以外の女人に憧れを感じた、これが最初のケー

スであつた。

吉川先生は脊が高く、顔は長めで、唇はやや厚く、眼尻が少し上つてゐた。色は白かつたが、動作は男のやうで、どちらかと云へば少し恐いやうな感じであつた。年齢はいくつくらゐだつたらうか。いづれにしても若かつたに違ひない。

○

いつの頃からか、仲間の惡童どもが、僕の名と兵頭りつ子の名をならべて、壁や塀のうへに落書きするやうになつた。僕が兵頭りつ子と偶然一緒にゐると、なんでもないのに囃したてたりする。ひどい奴は、僕の方へ、彼女のからだを押しやつたりする。

兵頭りつ子は、村の「煙草專賣局」の役人の娘で、他鄕人だつた。僕の家も、彼等の家の多くがさうであつたやうな、商家でも農家でもなかつた。そして一度はやはり他鄕に出てゐたのである。

そんなところから、周圍の者からは、いづれも多少差別視されてゐた傾きがあり、それが二人を結びつけて考へる因になつたのだと思ふ。兵頭の家と僕の家とは、別に交渉はなかつたし、僕は兵頭りつ子と、親しく交つたためしもなかつた。

勿論僕は兵頭りつ子を、好きだとも何とも思つてゐなかつた。それに、彼女は別に可愛らしい女の子でもなかつた。脊は低く、丸顔で、色が黑く、髪は赭ちやけて縮つ毛だつた。ただ、眼が大きく、言葉がはきはきしてゐて、何となく活溌な氣性のやうであつた。好きだとは思はなかつたが、特に嫌ひだと思つたこともなかつた。周圍の奴らが「ひやかし」をやり始めてからも、やはりこの無關心はつづいてゐた。

しかし、或る朝、こんなことが起つた。

始業の鐘が鳴り始めてから、僕は忘れ物を取りに歸るために——家は近かつた——校門の方へ驅け出してゐた。と、かなり向ふから、兵頭りつ子が、これも時間に後れまいとするらしく、顔を赤くして、走つて來るのが見えた。

その時は、他に人通りは殆どなく、校門の前の道幅は、二人がすれ違つて通るには充分の廣さであつた。また充分避け得る時間があつたにも拘らず、どうしたことか、二人が近づくと、僕は眞正面から彼女と鉢合せをしてしまつた。兵頭りつ子は仰向けにひつくりかへり、大聲をあげて泣き出した。すると、僕は、それを助け起さうともしないで、あとをふり返りもせずに、家の中へ駈けこんでしまつた。

僕はその後約二十年——トルストイの或る評論を讀むまでの——のあひだは、この出來事を想ひ出すたびに、僕と云ふ人間が、子供のときから妙にへまな、そして、なにか普通の人情を辨へないやうな、いけない所があつたのだと考へてゐた。トルストイの評論の中には、廣い原つぱで、腕に自信のない初步の自轉車乘りが、非常に遠方から來る人を避け得る時間とスペースは無限にあるのに、結局その人に衝き當つてしまふ、と云ふ話が人を納得させる說明と共に擧げられてゐた。（第四號）

おませ年代記

林家　熊丸

ハム坊八歳

「ぢや、いつてくるからね、お父ちやん。お父ちやんひとりでお留守番するんだから、寝てゝ、泥棒がはいるといけないんだからね。」

「泥棒がはいつたつて、なにも盗るもなァないだらう。」

「お父ちやんを盗つていくと困るぢやないか。」

「馬鹿云へ。お父ちやんなんか盗つたところで、何になるものか。」

「しぼると澤山お酒がとれるだらうつて、龍口町の小父ちやんが云つてたよ。用心おしよ、ね、お父ちやん。」

ハム坊九歳

「お父ちやんお父ちやん。」

「何だい。」

「毛のあるのと毛のないのとは、どつちが偉いの?」

「そりや毛のない方が偉いさ。」

「それぢや、お父ちやんの方が龍口町の小父さんより偉いんだね?」

「そりやさうさ。」

「ふぅん。それぢや龍光町の小父さんより魚の方が偉いんだね?」

「魚?　魚は駄目だよ。魚には鱗があるだらう。鱗つてものは、毛よりもつと下等なんだ。」

「お父ちやんのお頭には鱗はないね。」

「そんなものがあつてたまるか。」

「お父ちやん。」

「何だい。」

「ぢやァ龍口町の小父さんより蛸の方が偉い?」

「蛸?」

「蛸は鱗がないでせう。」

「蛸はね。あれは骨がないでせう。骨のない奴は、毛がなくても、もつともつと下等なんだ。」

「お父ちやんは骨があるね。」

「あたりまへだよ。」

「お父ちやん、お父ちやん。」

「うるさいね、何だい。」

「蛙は骨があるでせう。そして毛が……」

「もういいよ。子供つてものは。何だつて一つごとをいつまでもききたがるんだらうなあ。いいかい。蛙でおしまひ　だよ。蛙はね、蛙は……と。蛙はお臍がないんだ。」

「さう?　蛙は臍がないんだね。お父ちやんは臍があるね。」

「あるよ。」

「お父ちやんのお臍、見せてよ。」

「よしよし、今晩お風呂にはいつたとき、見せてやるからね。」

「お母ちやんにもお臍ある?」

「あるさ。」

「お風呂で見たの?」

ハム坊十三歳

「ハム坊。濞なぞすゝつて、なに讀んでるんだ。」

「ロマンスだよ。可哀さうなんだよ……ねえ、お父ちやん。」

「何だい。」
「お父ちやん、お母ちやんを愛してるの?」
「愛してるさ。」
「とても愛してる?」
「とても愛してるよ。」
「可哀さうだねえ。」
「なぜ?」
「お母ちやんも、とてもお父ちやんを愛してるつて云つてたよ。」
「それならいゝぢやないか。」
「お父ちやんたち、早く幸福になれるといゝね。」
「?」
「ねぇ、お父ちやん。お父ちやんたちの結婚に反對してるの、誰れ?」
「?」
「かまはないから、早く結婚したらいゝぢやないか、お母ちやんと!」

ハム坊十四歳
「お父ちやん、神經痛の藥の廣告が出てるよ。」
「さうかい。どれ、ちよつと見せな。」
「だけど、廣告なんか、あてにしない方がいゝよ。」
「いゝからお見せよ。あゝこれか。何だとナオルトケロリン酸。いや、こいつは人を喰つた名だの。」
「はい、眼鏡。」
「よく氣がつくね。エゝト、何處だつたつけ。あ、これだ。效能は肋間神經痛、坐骨神經痛、顏面神經痛、關節痛、レウマチス、痛風、其他一切の神經痛。キンカン博士創製。いけねぇ。」

ハム坊十五歳
「お母ちやん。」
「なあに」
「お母ちやんの初めてのメンス、いくつのときだつた?」
パチーン

(第十二號)

常識講座　鼻と男根

林　馬生

『山口源五左［右］衛門がこと。さる家中に山口源五左衛門と申す、ならびない弓の名人があった。 或る時、朋輩の者共集り、豫て聞き及ぶ貴殿が手並の程を、今日こそは我等が前にて示されよ、と申し入れた。源五左衛門、心得たりと、早速に弓を執って庭に立ち、雁股の矢をつがへて、天上を指してひようと射た。矢は忽ち雲上に騰つて姿を消した。源五左衛門の狙ひに狂ひがなくば、やがてその矢は元のところに下りて来ようず。されど、待てども矢は下りては来なんだ。人々は、さては源五左、仕損じたりなと、はやひそめいてゐた。然るところ、源五左衛門は覚えあり氣に天上を仰いで、元の足場を変へようとはせなんだ。さる程に、やがて件(くだん)の雁股は雲中より流星の如く現れて、元のところに下りて来た。人々はやんやと騒ぎ立てた。それはよけれども、その勢ひにて、地に落つるとき、雁股は源五左衛門が鼻の先(さき)と、勢(へのこ)の頭とを削(そ)いで落した。源五左、これはとうろたへ、

落ちたるものを拾うて顔と勢にくっつけた。されど、あまりのことに流石の源五左衛門も取り乱したりと見え、鼻の先と勢の頭とをとり違へてくつつけた。爾来、源五左衛門が美女を見れば、鼻先がうごめき出すのは、まだしも我慢もなったが、なにかの折に奥方のかくしどころの、怪しからず匂ふには、神明、我慢がならなんだと申すことでござる。』

右は延寳八年の「咄物語」の上巻に収められた話である。尤もこの本はいま手許にないので、文章は原本通りではない。「咄物語」は博文館の帝國文庫の落語全集に収録されてゐるから、帝國主義時代の良家に育つた方々(かたがた)は大てい御承知のことゝ思ふ。

それに依ると、鼻と男根との間に、形の上の相似のあることを、江戸時代の人々は強く感じてゐたに違ひない。尤もこの程度の知識が、江戸中期の文運を俟つて、甫めて發生したと考へる必要はない。現に台湾の原始民族の中にも、そんな思想の痕跡が見られる。これに就いては、台湾大学のK教授の報告 (Dentes vaginae 説話に就いて、台湾医學會雜誌第三十九巻第十一号、昭和十五年十一月) がある。それによると、パイワン族やルカイ族の彫刻には、男の顔面で鼻のあるべきところに、陰茎を刻んだものがあるさうである。

白人種の間にもそんな考へがあると見え、淑女の前で鼻を弄(もてあそ)ぶことは、よほどの失禮にあたると云ふのは、やはりそこから来てゐるのであらう。

元来、鼻と男根とは、外形が似てゐるばかりではない。解剖学的に見ると、陰茎には陰茎海綿体と云ふ組織があつて、急激に大量の血液を血管内に充(みた)たし得るやうになつてゐる。陰茎の膨張は、これによつて可能になるのである。

ところが、鼻腔壁にもこれと同様の組織をもつた、甲介海綿体と云ふのがある。容易に充血して膨大するところから、鼻腔内の氣道を狹くする。狹いところを一定量の空氣が通過するから、從つて鼻息が荒くなり、或は管楽器の原理に從ひ、鼻を鳴らす、という仕末になる。——これは楽音よりは魅力があると云ふことだ。——フリース (W. Fliess, Die Beziehung[en] zwischen Nase und weiblichen Geschlechtsorgane[n]. Leipzig - Wien, 1897. 3. 3.) は、この鼻甲介海綿体を、鼻の「性的部位 (Geschlechtsstellen.)」だと云つてゐる。

ところが、世間では別の観点から、却つて鼻と女性々器との間の関聯を説くものがある。鼻腔の粘膜は口腔粘膜などとは違つて、上皮組織が弱く出来てゐる。そのために出血しやすい。外部から損傷を加へなくても、血壓の上昇によつて自然的に出血することがあり、婦人の中には往々にして毎月規則正しく鼻出血をするものがある。これを「鼻の月經」などゝ云ふところから、鼻の生殖器の一部なりと考へるのである。しかし、それは偶然の一致であって、構造上の根據はない。但し、女性にも陰提［堤］や小陰唇には、陰茎と同様の海綿体があり、膨張もすれ

ば勃起もする。これと鼻の海綿体との一致は、男性の場合と同様である。鼻と女陰との間の関聯を説くならば、寧ろこの点を挙ぐべきであつて、陰提が勃起する時に、女性は鼻を鳴らすのである。

念のために断つておくが、鼻を鳴らしてゐるからと云つて、必ずしも常に下の方が膨らんでゐると考へてはいけない。風邪をひけば、やはり鼻の海綿体は膨らむ。同時に陰部が風邪をひくということは、先ずないとしたものである。

さて、鼻と陰茎との間に、かうした構造上、外形上の類似のあることが判つたとすると、その次に問題になるのは、両者の間の相関々係である。例へば、鼻甲介海綿体のよく發達したものは、陰茎海綿体もまた強く發達してゐるであらうか。これを結果の方から云ひ換へると、鼻息の荒いものは、下部の膨張率もそれに相應して大きいだらうか、と云ふ問題になる。残念ながら、この相関々係に着目したのは、世界の学者の中でも、さきのK教授くらゐのものださうだが、そのK教授もまだ實證的にこれを確かめてゐないと云ふから、今のところは何とも申されない。

それならば、両者の間の外形上の相関はどうだらう。

これを説く前に少し前置きをする必要がある。一たい人間の顔と云ふものは、右の半分と左の半分とでは、かなり形が違つてゐる。正中(まんなか)で顔を縦割りにして、右半分にそれと少しも違はぬ左半分をくつつけて一つの顔を作る。また同様にして左半分だけの顔を作ると、この二つの顔は別人の顔のやうに違ふものである。この事は誰でも知つてゐる。だから寫眞顔を氣にする人は、いつでも自分の氣に入つた方の半面を撮らせようとするものである。

つまり、顔の右半分と左半分とは、生れつき發達が違つてゐるのである。そして、そのことは、右半分と左半分とが、境を接して並んでゐる鼻の形に最もよく現はれる。どちらかの半分が、他の半分よりより強く發達してをれば、鼻は曲(まが)る。丁度、二頭立ての馬車の、一方の馬が他方の馬より勢ひが強ければ、馬車の軌道は弱い方へ曲るのと同じである。誰れの鼻も生れつき曲つてゐる。眞っすぐな鼻はない。

しかし、これは鼻だけ、顔だけの問題ではない。鏡に向かって大口をあいて見給へ。口の奥に上から口蓋帆懸垂と云ふ。赤い〜こんな形をしたものがぶら下がつてゐる。これが眞つすぐに垂れてゐるものは殆どない。曲つてゐるのが普通だ。博多人形は前半と後ろ半分とがくつついて出来てゐるが、人間は右半分と左半分がくつついて出来てゐる。右と左の両半の發達が異つてをれば、全身、ことに正中部には、至るところ同様の歪曲の現れるのが当然である。世には臍(へそ)まがりと云ふ人間もあるが、これはどちらへ曲つてゐるか、自分は知らない。しかし、その下の男根を見ると、たしかに曲つてゐる。そして、大ていは、左にまがつてゐるのである。

オットー・モーリス　林熊生共著近刊広告
人物は國分直一先生がモデルか（第七號）

男根が左にまがつてゐるのは、男根の右半分が左半分よりも強く發達してゐるためであることは、云ふまでもない。二頭立ての馬車の右側の馬が勢いがいゝのである。そしてこのことは、大たいに於いて全身にあて嵌る。鼻も、口蓋帆懸垂も、大ていは左に曲つてゐる。これは、大ていの人間が、生まれつき右利きであることゝ関聯するのであつて、人間のからだは、大たいに右の方が左よりも發育が強いのだ。小さい足袋を穿いたことのある人は、誰もが右足の方で、よけい難澁した経験があるであらう。

ところで一つの例外がある。きんたまは左の方が大きいぞ、と論君は抗議したいだらう。しかし、睾丸そのものは、決して左が大きくはないのだ。それを容れてゐる左の陰嚢が、右に比してよけいに垂れている。それで左の方が大きく見えるのである。左がよけいに垂れてゐると云ふことは、左の陰嚢筋――我々の意志を無視して、昼夜間断なく勝手に行動してゐる――が、右のそれよりも弱いことを表はす。つまり、こゝでも、やはり右の方が發育がいゝのである。

さて、臍やきんたまの問題はぬきにして、鼻と男根の問題に立ち戻ることにしよう。

以上の所説によると、大たいに於いて、鼻が左に曲つてをれば、陰茎も左に曲つてゐる。云ひかへると、鼻の右半分が左半分より大きい場合には、陰茎の右半分も左半分より大きいのが普通である。即ちこれを両者の間の、一つの相関だと云へば云へる。

それならば、いま一歩を進めて、左右の不揃いはあるまゝに、鼻の發達のいゝものは、陰茎の発達もいゝだらうか。手つとり早く云へば、鼻の大きいものは、男根もまた大きいかどうか、という云ふ問題が起るわけである。

さて、こゝに、アクロメガリー（末端肥大症）と云ふ病氣がある。病氣と云ふよりも症狀と云つた方がいゝ。脳下垂体の病氣の結果起る症狀である。脳下垂体に炎症があり、その前葉ホルモンの分泌が異常に盛んになると、この症狀が起るのである。

その症狀を一口に云へば、身体のあらゆる末端が強く發育するのである。例

へば、成長期のものにこれが起ると、上下肢は強く發育して身長が高くなり、往々にして巨人を作る――これをマクロゾミーと云ふ――成長期のものでなくとも、手足の指先が強く肥大する。鼻が太くなり、口脣(くちびる)が肥厚する。甚しい場合には、舌が肥大して口中いつぱいになる。同様の変化は勿論男根にも来るのである。

病的でなくて、生まれつき脳下垂体前葉ホルモンの分泌の盛んな者もある。やはり長身、大鼻、厚脣、巨根の人物を作るのである。また、さうした生まれつきは、集團的には、人種性としても現はれる。黒人はその例である。彼らは世界最大の平均身長を有してゐる。鼻は高いとは申されないが、横に廣く、鼻翼の肥厚してゐることは、これも世界随一である。口脣の肥厚してゐることも同様であり、そして男根もまた世界第一に大きいのである。

して見ると、理論上か云つて、大きい鼻と大きい男根との間には、やはり相関が成り立つ。だから、大きい用具を擇ぶ場合には、鼻の大きい――必ずしも高い必要はない――を擇ぶのが賢明である。それに脣厚く、指さきの太いところに眼をつけると間違ひはない、という云ふことになるであらう。

理論的にはさうなるとして、實際的にはどうか。またしてもK教授を煩はすわけだが、教授によると、上下の寸法を計り較べて、個人的の相関を求めた報告は、まだ現れてゐないさうである。しかし、一種の實験から、この相関を確認した人々のあつたことは確かである。一五五〇年に出版されたロディギヌスと云ふ人の書物 (Ludovicus Caelius Rhodiginus; Lectiones antiquae, Basel, 1550. Lib 27. Cap. 27. Col. 1058.) に「古人は、立派な鼻は立派なお道具を意味するものと考へてゐた。」とあるから、古くからさう信じられてゐたということが判る。また、一六六九年の「Geneanthropeia」なる書物 (J. Benedicti Sinibaldi; Geneanthropeia, Frankfurt, 1669. S. 172) にも、「かく、あらゆる点から見て鼻と外陰部との間に、調和と交感のあることが證せられる。巨大なる鼻は常に陰茎の太さと長さに相應するものである。」と教へてゐる。この書物にはまた、第三世紀の初葉に羅馬に君臨したヘリオガバラルス皇帝が、その左右に鼻の大きい人間ばかりを集めたのは、恐らく催淫作用による一種の回春法のつもりだつたのだらうと云つてゐる (S. 168.)。

しかし、この學説乃至俗信を、最も有名にしたのは、かの悪名高きナポリの女王ヨハンナであらう。この女王は、一三七一年に、ドゥラッツォ家の息女として生れた。父は「小男のカルロ」である。彼女はこのドゥラッツォ家とアンヂュウ家との間の執拗な私闘のため、不幸な一生を送るべき運命を擔つて生れたのであるが、十九歳のときオーストリヤのヰルヘルム土地侯に嫁ぎ、七年目には未亡人となつてナポリに帰つた。兄のラディスラウスの死後、家を襲つてナポリの女王となる。彼女の乱行はこの時から益々

激しくなるのである。彼女はヘリオガバラス帝の例に倣つてその左右に鼻の大きい男を蒐めるのであつたが、この蒐集は勿論単なる回春術のためではない。「鼻奴(め)、よくも朕を欺きをつたな。」と云ふ罵りの言葉が時々不満の一夜を明かした翌朝、それにふさはしい刑罰の宣告に先立つて發せられたと云ふ。解剖學的例外の存在を、彼女は容赦できなかつたのである(Henrici Salmuthi［Salmuth］; Commentarius in Panciroll. “Res memorabiles”. Frankfurt, 1660, S. 177)。して見ると、シラノ［・ド・ベルジュラック］以前にも、鼻の悲劇はあつたのだ。

日本にもこの種のトラブルを取扱つた話がある。寛永のころ印行された「昨日は今日の物語」の中の、次の一節は知る人も多いであらう。

「或る人俄(にわか)に医師(くすし)を心がけ、医書を集めそろそろ讀みて、合点の行かぬところに、付紙(つけがみ)を付ける。」女房これを見て、「其の紙はなぜに付けさせらるゝ。」と問へば、男聞きて、「是れは不審紙とて、合点の行かぬ所に付けて、後に師匠に問ふためにつける。それに由りて不審紙と云ふ。」女房聞きて、「中々の事ぢや、おれも不審がある。」とて、紙を少し引き裂きて、唾(つばき)を付けて男の鼻の先(さき)にひたと付くる。「これは何事の不審ぞ。我等が鼻に不審は有るまい。」と云ふ。女房聞きて、其の事ぢや。世上に申ならはし候。男の鼻の大きなるは、必ず彼の物が大きなると云ふが、其方(そなた)の鼻は大きなれども、彼の奴は小さい。それが不審ぢや。」……』

丁一大［丁大一］の「續志諧(昭和七年)」に収められた「鼻の高い男」と云ふ朝鮮の話は、もつと猛烈だ。

『鼻の高い男。　巨物を好む女があつてね。鼻の高い男を探してゐた。鼻が高いと、あれもでかいと云ふんでね。或る市の日に、大道で往来の男達を見てると、来た来た、滅法に高いやつが。行色は草々としてゐるが、でつぷり肥つた堂々とした男でね。この男をのがしてはてんで、甘い言葉で言寄つた。そして彼氏を見事陥落させ、その晩は山海の珍味を供へて歓待した。ところがさ、夜が更けて、さて○○○［よなべ］を始めて見ると、まるつきり見当がはづれてしまつた。その小さいことつたら、まるで子供のそれのやうでね。馬鹿馬鹿しくて、くやしくつて。足でぽーんと胸倉を蹴とばした。が、あの鼻が恨めしいやね。で、彼女は仰向けに倒れた奴の顔に跨り、己が○○［赤貝］を奴の鼻にぶつ被せて、めちゃめちゃにこすりつけちやつたね。その方が寧ろ優秀で、それで結構放射しちやつたんだね。

彼氏、息がならず、暫く昏倒してゐたが、氣がついて見ると、東の空が白けて来た。大急ぎで衣物をなほし、蒼黄として外へ出た。いまだ人通りはない。そこへ丁度女中風情の娘に出会った。するとその娘が

「もし、重湯はどこで賣つてましたか?」

ときくんだ。彼女は母乳のない赤ん坊

に飲ませるため、重湯を買いにでたところだったんだね。彼れ氏

「わしはそんなところ知らんよ。」

と答へた。けれど女中承知せず、彼れ氏の顔を指しながら

「嘘をおつしやつたつて駄目ですよ。重湯を飲んだ跡が、鼻や鬚のあたりにいつぱいついてるぢやありませんか。」』

中国にも恐らくこの種の話があらうと思ふが、自分はまだ見出し得ない。しかし、とにかくこれで見ると、東西軌を一にして、大鼻即巨根の信仰はあつたのである。たゞ、その信仰は如何なる観察から生れ、その観察は如何なる経験の集積によつて成立したのであらうか。自分はそれを考へると、ひとつの教訓に到達せざるを得ない。

「婦人は元来科学的な思考者ではない。しかし、身に切実な問題に関しては、徐々にして科學者と同様の結論に達することもあるのである。」

自分は決して女性を軽蔑しないつもりだ。これに就いて、何処かで見た言葉を思い出した。それは、

「原始氏族に於ける、彼等の獲物（えもの）の習性に関する知識は、屢々現代に於ける科學的観察を凌駕するものがある。」

と云ふのである。その本には獲物のことをゲームと書いてあつた。（第二號）

編集後記（第二號）

御覽の如く第二號は頁數に於て前號の二倍强容積に於いて三倍になつた。壯觀である。原稿の集りのよかつたのは編輯者の有德の致す所であらう。

○名前は「如意」である。意の如く書けると云ふ所に回覽雜誌の特徵があるであらう。林馬生先生の特別講座の如きは一寸他では見られない筈だ。

○矢野［峰人］、馬場［爲二］兩先生の御寄稿をいただいたのは感謝に堪へない。次號には矢野先生の他に森於兎の玉稿がゐただける筈である。

○近來青少年の間に回覽雜誌流行の徵がある。老青年共も負けずにつづけませう。次號の編輯者池田牽牛子君大いにがん張つて下さい。

○「初戀の記」特輯欄は他の原稿が間に合はず、池田君の獨舞臺となつて彼は大儲けである。

○本號の帙は印度更紗。切り繪は熱河省承德地方のもの。題字其池は立石［鐵臣］畫伯を煩はした。製本不手際で慚愧の至りである。

（蓬頭兒）

（あんけいゆうじ・あんけいたかこ）
http://ankei.jp
メール　a@ankei.jp